

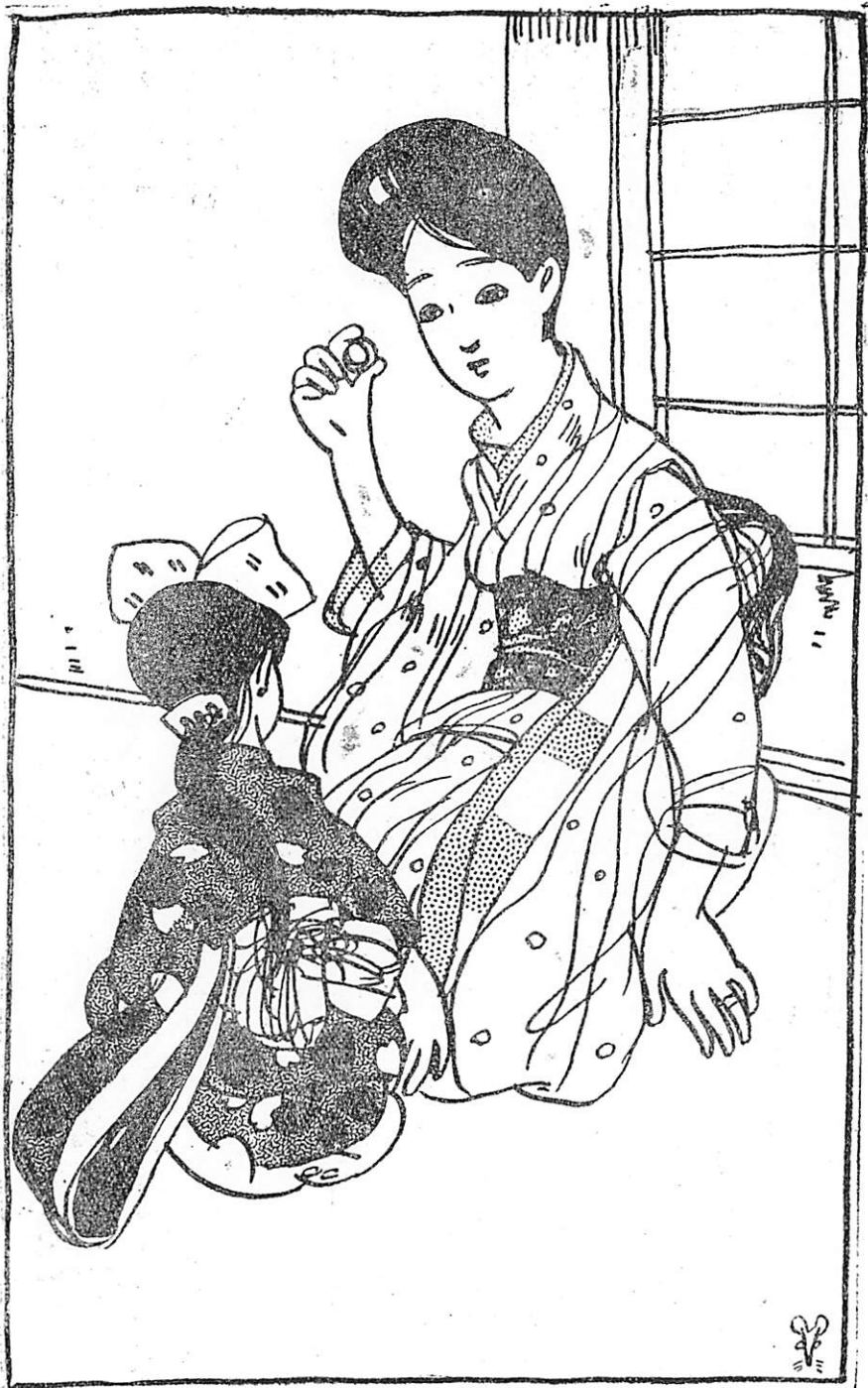
## 姉様の指環

永代美知代

花枝さんは姉さんの指環が欲しくつて堪りません。細い眞白なお指にきらめくルビーやサファイヤの紅い碧い寶石入りのも綺麗ですけれど、それよりも花枝さんの欲しいのは、姉さんの左の中指にはまつた、寶石もはいらぬ彫刻飾りもない、たいの蒲鉾形の指環です。

姉さんは何故だか、この蒲鉾形の指環を何よりも一番大事になすつて、年中はめていらつしやらない日はありません。他の寶石入りのなんぞだと、花枝さんが貸して下さいとお願ひさへすれば、花枝さんの小さな指に合ふやうに、紙なんぞをつめに巻いて貸して下さいますけれど、蒲鉾形のだけは、どうしてもいけませんと、お首を振つてお聞き入れになりません。

『ようつてば姉さん、何故なの？ 何故いけないのよ』



う。』  
と、縦ら斯様お鼻を鳴らして、せびつて見ても駄目です。花枝さんが餘りうるさくせつつくものですから、終ひに姉さんは、

『だつてもねえ、これは記念の指環だからいけません、大事の大事の、大切な記念の指環なんですから。』  
『記念つて、何の記念？』  
姉さんは黙つて指環をぬきとつて、暫らくじつと見ていらつじやいしましたが、

『ねえ御覽なさい、こゝんところに、ちよいと針で突き刺したやうな、小さな孔が見えるでせう、ねえ、そら指環の中央よ。』  
と、花枝さんの眼前へつき出して、お見せになりました。

『え、見えてよ、まあ勿體ないわねえ、お裁縫の針がさつて、それでこんなに孔が開いたんでせう。』  
『いゝえ違ひます、この孔はねえ、魔法の孔なの。』  
『え？』

花枝さんはいと大きな瞳をパツチリ瞳つて、姉さんのお顔を見つめました。

『魔法の孔です。』  
と仰る姉さんのお顔は、凄いやうに思はれる程厳かでした。

『まあ魔法の孔？』  
花枝さんが長いまつげを、ばちくり／＼させて居ますと、

『だからね、貸してあげられない理由なんですよ。この指環は魔法使ひのお婆さんから貰つた、記念の指環なんですもの。』

『魔法使ひのお婆さんつて、やつぱりあの、誰をでもびつこの牝馬だの、めつかちの羊にしたりする、あの魔法のお婆さんなの？』

『左様ですよ、ですけれどもね、この指環を下すつた魔法のお婆さんは、云ふ事をきかなかつたり、悪戯をしたりしない者には、別に何にもしないのよ、だから花枝さん、そんなに怖がらないでも可いわ。』

『だけれども私——姉さんは何故、どうしてお貰ひなすつたの?』

『魔法の國へ行つて来た記念ですよ。』

『アラまあ!』

花枝さんは驚いてしましました。

『魔法の國は面白い處ですよ、花枝さんは行き度くつて?』

行き度いと行つて可いか悪いか、行きたいやうな氣もしますけれど、何だか不氣味で怖いやうな氣もします、花枝さんは黙つて居ました。

姉さんはね、着物が欲しくつて、着物のなる木の國へ行きたいと思つて、それで魔法の國へつれて行かれたのよ、魔法の國にはね、羽織のなる木だの、帯の木だの、それからリボンやお足袋の畑もありますよ、柘榴の木かと思ふと、それがお巾着の木だつたりするの。花枝さんにも見せなかつたわ。』

『指環は? 私ね姉さん、指環が欲しくつて仕様がないのよ。』

『そんなら姉さんが魔法のお婆さんと呼んであげませうね、御一緒につれて行つてお貰ひなさい。』

『え、だけれども呼ぶつて如何して?』

『なにね、譯はないの、魔法の孔からのぞいて、アブダラブダラつて三度云ふと、お婆さんは何時でも直ぐ来るつて約束なんですからね。』

『お婆さんつてどんな方?』

『どんな方つて、ちよいと云へないけども、この頃ならね、櫻か胡蝶を細かく散らした小紋の小袖を着ていらつしやるでせうよ。』

『随分好いなりだわね、やつぱり着物なんぞ、何でも木からもぎつては着るんでせうねえ、私指環が欲しいわ、姉さんのやうな。』

『だから行くと好い、アブダラブダラ——』

姉さんがとなへごとをお初めなさると一緒に、お庭先きを胡蝶が飛んで、花枝さんは魔法のお婆さんの着物の袖が見えたやうに思ひました。

『アブダラブダラ——』

『姉さん!』

花枝さんは周章と呼びました。

『アブダ——』

姉さんが三度目のとなへ言にかゝると、花枝さんは夢中になつて、

『姉さんてば!』

と呼びとめました。

『何ですよ、今少しで、お婆さんが来るとこぢやありませんか、待つてらつしやい。』

『いゝえ姉さん、ちよいと待つて頂戴よう、姉さんも一緒に行つて下さらなきや私、一人ぢや怖いわ。』

『だつて姉さんは行きたくないんですもの、着物のなる木の國へ行つて来て、もう魔法の國なんぞ、こりこりしちやつたの。お婆さんがねえ、お前のやうな、やたらに品物を欲しがるものは、もう一生魔法の國へ置いて、着物責めにするんだつて云ふのを、散々詫びて、無理に歸してもらつたんですもの、姉さんは嫌ですよ。』

『アラまあ怖いわ私、ねえ姉さんお詫して頂戴よ、もう決して、決して花枝は人様の指環なんぞ欲しがりませんつて、ねえ姉さん。』

花枝さんは姉さんのお袖にすがつて、やつと魔法のお婆さんがつれに來ないやうに、お詫びをして貰ひましたけれど、姉さんのあの細い、眞白なお指にはまつた蒲鋪形の指環を見れば見る程、欲しくつて堪りません。

『不氣味だけ共、いつを行つて来ようかしら——』

花枝さんは、櫻が散つたり、胡蝶が飛んだりする度に、若しや、魔法のお婆さんの着物が見えたのではあるまいかと思つて、怖いやうな、懐しいやうな、いり亂れた氣持に胸をおどらせました。

—完—

